総合都市研究　第69号　1999

年賀状事例調査を通じての大都市のパーソナルネットワーク

1．研究目的と調査方法
2．分析結果
3．まとめと考察

矢　部　拓　也*

要　　約

本稿では、年賀状を資料とした事例調査を行うことにより、個人のパーソナルネットワークと社会構造の関連を事例調査から明らかにすることを目指している。特に、年賀状を資料とすることにより、これまでの大量調査からでは捉えることの難しかった、弱い紐帯をも含めた幅広い範囲を網羅したパーソナルネットワークの様相の把握を行う。これを基礎資料とし、パーソナルネットワークに関する質的な情報を対象者から聞き取ることで、パーソナルネットワーク内の内部構造、パーソナルネットワークとライフコースの関係、機関とパーソナルネットワークの関わりなどを明らかにする。また、特徴的な二つの事例を紹介し、パーソナルネットワークが、都市の主要な構成要素である機関と、個人の属性的要因である社会構造上の地位とライフコース上の位置の関数で決定されて行く過程を明らかにする。

1．研究目的と調査方法

1．1　問題関心

本稿では、個人のパーソナルネットワークと社会構造の関連を事例調査から明らかにすることを目指している。特に、年賀状を資料とした事例調査を行うことにより上記の目的を達成しよう思う。Wellman（1979）のトロント調査（第一次調査自体は1968年に実施）やC.S.Fischer（1982）の北カリフォルニア調査（1977～78年に実施）以来、ソーシャルネットワーク、パーソナルネットワークやコミュニティネットワーク研究が注目を集めてきた。日本でも、松本康（1995）や大谷信介（1995）をはじめとして、パーソナルネットワーク研究は多くの成果をあげている。これらの一連の研究は、基本的には日本の都市社会学にパーソナルネットワークへの注目を喚起させたフィッシャーと問題関心を共有している。フィッシャーの研究関心の中心は、都市度がパーソナルネットワークに与える影響にあり、より具体的には、都市生活は人びとを孤立に陥れるといった都市人間生活を否定的に捉える古典的な言説（決定理論）の否定にある。彼は、文献調査や標準化調査や事例調査などを通じて、多面的に都市度がパーソナルネットワークに与える影響を議論し、決定論の否定を行っている。そしてこの決定理論の代替理論として下位文

* 東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）

化理論を提示する。これらをふまえた日本のパーソナルネットワーク研究においても、都市度が友人ネットワークに関して効果を与えることは基本的には支持されている（松本、1995；大谷、1995；浅川、1997）。大谷（1995）は、現時点のパーソナルネットワーク研究の総括として、これまでの社会学研究を＜集団を媒介とした＞＜社会関係＞を＜分断的・個別的＞に捉えるという視点に立って行われてきたと批判し、パーソナルネットワーク研究を＜個人を中心とした＞＜人間関係＞を＜横断的に＞分析する視点に立つ研究と位置づけ、都市性を解明する新たな方法として評価をしている。その一方で森岡清志（1995）は、現在のパーソナルネットワーク研究がミクロ水準の関係理解にとどまり一種の閉塞状況にあると総括し、その原因を現状のパーソナルネットワーク研究の対象が、個人と直接に結ばれる親しい人びと（強い紐帯）に限定されている点を指摘する。そして、「この親しい人びと（強い紐帯）だけを対象としている限りはよりマクロな構造へとネットワークの拡大して行く連結点を見出し得ない。都市社会構造の主要な単位とのつながり、すなわち都市の諸機関や諸集団とパーソナルネットワークとのつながりが明らかにされないからである」と結論づける。つまり、これまでの調査研究では、特定のサポート関係の人物を挙げてもらったり、職場などで親しくおつき合いしている人を尋ねることで、強い紐帯としてパーソナルネットワークを把握してきたと言える。強い紐帯の周りに形成されている弱い紐帯（例えば、特に親しいわけではない知り合い程度の人、なんとなく仕事がらみでつきあいが継続している人、会う頻度は少ないが同窓会などで定期的に会う人など）の存在は最初から、対象から外されていた。しかしながら、たとえば、パーソナルネットワークの形成過程を考える場合、このような強い紐帯の部分だけを見ていたのでは、最初は余り親しくなかった人物が徐々に親しくなりパーソナルネットワークが構造化されゆく側面を見ることはできない。パーソナルネットワークの一部が構造化され、他方は解体され再編成して行く姿を捉えるためには、特定人物に対する時間軸的な紐帯の強さの変化と、現時点での様々な強さの紐帯をできるだけ幅広く把握する必要に迫られる。そして、このようなパーソナルネットワークの動的な部分を支える場として、都市の機関や集団が存在している。例えば、現在は月に何回か会い相談事をしたり遊びに出かけたりするような親しい間柄（強い紐帯）であっても、最初は単なる職場の人であったかもしれない。また、何よりも、最初から対象を限定していたなら、都市の機関を媒介とする偶然の出会いから生じた紐帯など、個人それぞれの多様なパーソナルネットワークの広がりと都市との関連を見ることができない（Boissevain、1974）。そこで本研究では、これまでのパーソナルネットワーク研究が余り対象としていなかった、弱い紐帯をも含めた対象者のパーソナルネットワークの全体像を把握し、そこら都市構造との関連を明らかにしてゆきたい。

1．2　年賀状を資料とする理由

ここで問題になるのは、このような弱い紐帯をも含めた、対象者のなるべく幅広いパーソナルネットワークの全体像をいかに把握するかである。パーソナルネットワークの範囲を親しい人に限定して問う場合には、対象者の記憶に頼ることができるが、幅広いパーソナルネットワークを知る場合には、何かしらの交際の記録に頼る以外ない。そのような記録としては、アドレス帳や手帳、日記、年賀状、香典帳が考えられる。ただし、アドレス帳と手帳は私的なものであるため、対象者の合意がなかなか得られにくい。また、香典帳は最も広くパーソナルネットワークを把握できると考えられるが（笹森、1995；岩上・森岡、1975）、この場合は対象が故人を中心としたパーソナルネットワークや家ないし世帯中心のネットワークを把握することになる。これに対し、年賀状は、①年賀状を交換する習慣が既に広く一般化しており、かつ送られてきた年賀状を1年間保管している可能性が高いこと、②記録された住所・氏名をもとにネットワークの確実な事実として把握することができること、③日常的付き合いを結んでいるネットワーク情報の他に、この外側に展開される

ネットワーク情報も含んでいることなど（石原、1970）、余り親しくない人びとや知り合い程度の人々とのネットワークを全部ではなくとも、確実に捉えることができるデータソースと考えられる。そこで本研究では、現在生きている人物のパーソナルネットワークを確実に把握でき、かつパーソナルネットワーク構成員に対する調査対象者の意味づけをも聞き取れる資料として年賀状が適当でないかと考えた（森岡、中尾、玉野、1997）。

その上で、以下の様な調査課題を設定した。①これまでの調査票による方法では捉えにくかった「あまり親しくない人（弱い紐帯）」をも含めた幅広い範囲を網羅したパーソナルネットワークの様相の把握、②対象者の主観的なパーソナルネットワーク分類の仕方（内部構造）：カテゴライズとゾーン（親しさ）分けの把握、③パーソナルネットワークとライフコースとの関わりの把握、④機関とパーソナルネットワークの関わりの把握、である。

本稿では、紙幅の都合上、調査結果の概要と、上記4課題のうち、第4の課題である機関とパーソナルネットワークの関わりに限定し、事例にもとづき報告する[1]。

1．3　調査対象・調査方法

年賀状事例調査は、1997年7月下旬～9月の間に実施した。調査対象は、5都市7地点（東京都文京区・調布市、福岡県中央区・西区、新潟市、富士市、松江市）で行った標準化調査の対象者のうち、東京で面接可能な2地点、文京区（142票）と調布市（138票）の回答者に対して年賀状をもとにした調査の依頼を郵送で行い、その結果協力を得られた、文京区10ケース、調布市9ケースの計19ケースについて行った（森岡、中尾、玉野、1997）[2]。調査依頼状回収率、調査拒否理由は図表1、2を参照。

調査票は5種類の用紙で構成され、調査票にそって1種類目から順次対象者に質問して行く半標準化された調査を実施した。

1．4　調査票構成

1種類目：フェイスシート

対象者の性別（既知）、年齢（既知、確認）、家族構成、現住所（既知）、職業（具体的な内容、退休職者は元の職業、無職女性は配偶者の職業）、学歴、移動歴（出生地、中学校卒業時居住地、最終学校卒業地、初職時居住地、結婚時居住地、その後の居住地、現在の居住年数）。

2種類目：年賀状全体の分類の仕方に関する項目

まず年賀状を、対象者に自由に分類してもらい、そのわけ方を写し取ってきた。そして、それぞれどの様な意味を持った分類なのかを質問した。そ

表1　調査依頼状回収数

	依頼状発送数	転居先不明により配達できなかったもの	調査には協力できない	調査協力者数	本人に対する面接が出来なかった事例	依頼状回収率	調査協力者率
文京区	142	9	31	10		30.8%	7.5%
調布市	138	2	25	9	1	25.0%	6.6%

表2　調査拒否理由

	無記入	調査の趣旨に賛同できない	喪中につき年賀状は出さなかった	破棄した	多忙につき時間がとれない	転居のため	家を離れて遠方にいる	近親者、本人の病気のため	本人死去	面接調査は拒否、アンケート式なら可能
文京区	18	1	3	1	4	1	1	1	0	1
調布市	15	1	0	1	1	2	1	2	2	0

してそのカテゴリーごとに年賀状を親しさの順に並べ替えてもらった。この作業により、対象者一人一人がパーソナルネットワークを主観的にどの様にカテゴリー化しているか、カテゴリー内部での親しさの度合いの差（ゾーン）をどの様に決定しているのかが把握でき、そこからパーソナルネットワークの内部構造が見えるのではないかと考えた。

3種類目：年賀状1枚1枚に対する質問項目

カテゴリー化された年賀状の束ごと、年賀状一枚一枚に関して聞き取ってくる項目である。年賀状一枚ごと、1「この方とはどの様なお知り合いですか」、2「知り合ったきっかけ」、3「知り合ってからの期間（年）」、4A「この方とは現在どの様な機会に会いますか（会う頻度、会う場所、集団や組織との関わり）」、4B「月に1回以上決まって会う場所がある場合、決まって会う場所と、そこに行くまでにかかる時間距離」、5「性別」、6「年齢」、7「職業（自営、上層NM、下層NM、M、パート、主婦の区別可能な程度まで）」、8「学歴」、9「居住地（都道府県、市区町村）」を尋ねた。特に、2「知り合ったきっかけ」、3「知り合ってからの期間（年）」を記す際、調査票の1種類目の移動歴と対応しながら聞き取りを進めることで、対象者のキャリア、ライフコースに関する理解を深め、時系列的な視点を獲得することを目指した。特にキャリアが込み入っている場合は、調査者の判断で別紙に移動歴・職歴を聞き取ることとした。

4種類目：年賀以外の付き合い

年賀状に現れない親しい人物（喪中、近隣、親族）に対応するものである。何らかの理由で年賀状は出してはいないが、対象者にとって親しい人物がいる場合もあろう。その人物を挙げてもらい、3種類目と同じ項目について尋ね、最後に年賀状の分類でいうとどのカテゴリーに入るのかを尋ねた。

5種類目：年賀状全体に対する質問項目

年賀状全体に対する質問として、「これらの中で最も親しい人びとは誰か？」、「今挙げた親しい人びとは互いに知り合いか？」、「むかしは非常に親しかったが、現在は以前に比べて余り会う機会が少なくなっている人は誰かいるか？」という点について尋ねた。これらは、年賀状の枚数といった量的な側面からばかりでなく、個人個人のパーソナルネットワークの質的な側面をも把握することを意図し質問を行った。

2．分析結果

2．1　調査協力者の特性とパーソナルネットワークに関して共通する特徴

調査協力者19名の特性は表3のような結果となった。本調査では、男性40・50代のホワイトカラー層の協力が得られなかった。結果的に、全体として、時間のやりくりが個人で可能な人々が調査に応じてくれたように思われる。そのためか、自営業者や独身者や定年退職者が多い傾向がある。

年賀状を含め調査を通じて把握したパーソナルネットワークサイズが、最も少ない人が16人（調布O．Cさん）、最も多い人は210人（調布A．Tさん）であった。分類されたカテゴリー数は、最も少ない人が3カテゴリー（調布K．Sさん）、最も多い人で12カテゴリー（文京U．Mさん）。年賀状の枚数、分類されたカテゴリーともに、高齢者の方が多くなる傾向があった。

上述の具体的な調査課題のうちの「②対象者の主観的なパーソナルネットワーク分類の仕方（内部構造）：カテゴライズとゾーン（親しさ）分け」「③パーソナルネットワークとライフコースとの関わり」に関しては共通する特徴が見出された。

対象者の主観的なパーソナルネットワーク分類の仕方（内部構造）を明らかにするために2種類目の調査票で対象者に年賀状を自由に分類してもらった結果、多くの対象者がまず親族関係を別個独立した1つのカテゴリーとして扱い、次いで親族外の分類に入る点で共通している点が見出された。また、親しい人物としては、同世代の同性を選択する場合が多かった。親戚に対する分類に関しては、親戚は独立した1つのカテゴリーを作り、建前上はそれぞれの人物に対する親しさの度合いを区分することには抵抗感を示した。さらに、親戚をいくつかのサブカテゴリーに分けている場合

もある。親戚に対しての親しさの度合いは、特に付き合いが頻繁な親戚を除いては、血縁関係において近い順番に親しさの度合いを言う傾向があった。親戚以外の人物に対する分類の仕方には、典型的なパターンとして以下の二つが見出された。ひとつは、「出会った社会的文脈ごとの分類（例えば、職場、学校、サークルなど）」。他方は「（会う頻度など）一次元的分類（例えば、会う頻度、親しさなど）」であった。

パーソナルネットワークとライフコースとの関わりを明らかにするために、知り合ってからの期間を5年ごとに区切って見てみると、年齢が高くなるほど集中する時期が多くなる傾向があるが、全体的には、集中する時期は2つにまとまる。1つは学生時代がほぼ共通して見られる時期であり、今ひとつは、現在活動している中心的な諸集団（職場・サークル）への参加時である。基本的なパーソナルネットワークの様相は、現在の活動状況、学校時代の二つの時期を中心として展開されている様子が見てとれる。これらを基本として、個々人の現在の社会的状況（家族との関係、職業、ライフステージなど）による制約と、人付き合いの好き嫌いといったパーソナリティなどの個性と絡み合い、多様なパーソナルネットワークが形成されているものと考えられる。

2．2　個別事例的なパーソナルネットワークの様相

上述のような共通性が比較的当てはまり選択的なパーソナルネットワークを形成している1事例

表3　年賀状事例調査の対象者の特性と年賀状の枚数・カテゴリー数

居住地	仮名	性別	年齢	職業	学歴	引っ越し回数	同居人	年賀状の枚数	調査票全体を通じてのパーソナルネットワークサイズ(人)	調査票全体を通じてのカテゴリー数	概要
文京区	K. H	男性	38	印刷工員	高校	5	独身	0	13	4	印刷街における独身男性の職住近接型ネットワーク
文京区A	S. M	女性	67	無職	短大相当	7	独身(47才で死別)	72	86	9	親族との関わりを持ちつつ一人暮らし(ケア付マンションに引っ越し)を志向するネットワーク
文京区	S. Y	男性	54	自営業社長	大学	2	配偶者、子供3人(2人大人、1人高一)	28	28	5	儀礼的関係は捨て去り、本質的な関係形成を唱う起業家のネットワーク
文京区	F. W	女性	44	主婦	短大	2	配偶者、娘(11才)、息子(8才)	23	35	10	遠距離への移動経験がないために、これまでの豊富な関係を維持している事例
文京区	Y. M	女性	44	秘書業務	専門学校	6	独身(32才で離婚)	50	52	6	活動的に働く女性のネットワーク
文京区	K. A	女性	58	主婦(自営業手伝い)	高校	1	配偶者、自分の親	32	40	5	教会を中心とした夫婦単位のネットワーク
文京区	U.M	女性	59	事務職(7月退職)	高校	7	配偶者	104	111	14	趣味、(職場)、町内、別荘と多核心型ネットワーク
文京区	U. N	男性	26	司法試験勉強中	大学	2	独身	17	22	4	大学付近に住む司法試験勉強仲間を中心としたネットワーク
文京区	N. A	女性	69	絵画教室経営、画家	専門学校	4	独身	50	57	6	芸術活動を通じてのネットワーク
文京区	S.J	男性	64	定年	大学	1	配偶者、配偶者の母	110	110	5	サラリーマン文化を維持している退職者のネットワーク
調布市	U.J	女性	75	無職	尋常小学校	5	配偶者、娘夫婦、孫2人	35	57	9	安定した親族、同居家族の上に、運動サークルに熱中する高齢者のネットワーク
調布市	K·Y	女性	31	一般事務	高校	1	独身、荒川区出身	17	18	3	友人の結婚退職により、ネットワーク分断に直面する独身OLのネットワーク
調布市	S. S	男性	63	中小企業(建設業)社長	高校	7	配偶者、娘(26才)	37(他139)B	37	4(他2)	起業家(建設業、中小企業倒社長、多様な職業経歴)のネットワーク
調布市	U. Y	男性	72	定年(弟の会社の役員)	大学	5	独身(48才で妻、66才で子死別)	164	164	9	人生の道づれとしての学校時代の友人を中心としたネットワーク
調布市	O. C	女性	45	パート	専門学校(英語関係)	3	配偶者、配偶者の両親	16	16	6	家族と近所に住む娘を中心とした(修正拡大家族型)ネットワーク
調布市	A. T	男性	61	無職	大学	4	配偶者	218	210	6	退職後の新しいネットワーク再形成を積極的に行っている事例
調布市	I. A	女性	57	テニスクラブ経営	高校	3	別居，一人で住んでいる	52	55	4	自分のテニススクールを媒介としたテニス文化普及を目指すネットワーク
調布市	K. S	女性	39	主婦	大学(夜間)	3	配偶者、息子(11才)、娘(9才)、自分の母	24	24	3	サークル志向の(地域定住型)のネットワーク
調布市	K. K	男性	25	銀行員	大卒	4	独身(会社の独身寮)	15	32	6	同輩(同期)関係中心のネットワーク

A　現在の居住地は八王子市南大沢のケア付マンション

B　かっこ内は仕事関係83枚，その他取引関係56枚の合計．これらを細かく調べることは本研究の趣旨とは異なると考えられるので分析から除外した．

と、それとは対照的に地域的制約性が強く現れた1事例を紹介する。

(1) 学校友人との関わり：人生の道づれとしての学校時代の友人を中心としたネットワーク、(調布市、U．Yさん、72歳、妻・娘と死別)

U．Yさんは、調布市在住の72歳の男性、現在は主に年金で暮らしている。1924年、東京都渋谷区生まれ、小学校の頃から絵描きを目指す。中学・高校は青山学院、その後、上野にある美術学校、神田の美術系専門学校に通う。1957年（33歳）結婚。結婚後すぐに妻が結核で倒れ、昭和30年代は妻の看病に追われる。このような事情もあり、油絵を専門にしていたが、商社の専属のデザイナーになる。同時に都の職員としても働き、このころの3－4年間は新宿に近いところや中野に住んだりしたが、結局渋谷に戻る。戦後、妻の父が事業に失敗し、その借金を被る事になる。1963年（39歳）、弟の海外映画の吹き替え会社の役員になる。1968年（44歳）調布に移ってくる、以後現在まで現住所。1969年（45歳）長女が生まれる。1973年（49歳）妻死去。この年商社の専属デザイナーを辞める。1985年、60歳で都の職員を退職。1991年（67歳）長女事故死（享年23歳）。現在は単身。このような事情から、対象者は妻が病気で倒れた昭和30年代以来ずっと「主夫業」をしており、家事は特に困っていないそうだ。市の福祉の職員が家に来たときも、家がきれいなので誰か親しい女性がいるのかと尋ねられたほどだそうだ。年賀状は、事例中多い部類に入る164枚。親しさの感じる順に以下のようにカテゴリー化されている。「①親戚関係」28枚、「②特に親しい青山学院（中等部・高等部）時代の友人」13枚、「③（一段階親しさの落ちる）青山学院と大学での友人」22枚、「④小学校での友人」15枚、「⑤一般の友人・知人」31枚、「⑥友人（お寺や医者など）」7枚、「⑦外国にいる方（外国人、国外居住日本人）」10枚、「⑧俳句関係の友人」17人、「⑨仕事をしていた時（都の職員）からの友人」21枚。この他に、今回は分析から外したが、亡くなった娘さんの友人達からの年賀状が約30枚ほどある。対象者は年1回娘さんを「偲ぶ会」を、彼女の友人達を招待して行っている。年齢は27～30前半、男女半々ぐらいである。この「偲ぶ会」に出席してくれた方とは毎年年賀状のやり取りがあるが、彼らとは、この会以外で特に会うことはないので、以下の分析では外して考察をする。本事例は、本人の社交的な性格もあり、上述のように、年賀状の枚数、関係性ともに多岐に渡っている。これだけの関係性の中には、当然、学校・俳句関係（現在活動している諸集団）との関わりばかりでなく、偶然の出会いから、現在まで交際を続けている事例も何件かある。例えば、「④一般の知人・友人」には球場で偶然隣の席の女性と同じヤクルトファンということで意気投合し、現在も年に4～5回位一緒に野球観戦をする関係の人物が2名いたり、飲み屋で意気投合して現在も毎年演奏会を聴きに行くタンゴ演奏家や、同じように別の飲み屋で意気投合して知り合った絵描きが年4～5回開くガレージセールに顔を出したりと、まさに結節機関において人と出会い、交流し、異質な他者との接触の機会を得ている。彼らとの関係は、ネットワークの中心をなすわけではないが、このような緩やかな結びつきは、対象者の人生にメリハリをつけ、社会に対する様々な領域への関心を呼び起こし、異なった価値観、社会生活を営む者との接触、共感を生む場となっている。後述する、同級生を中心とする関係とは質的に異なった領域を形成している。ここであげられていた人々は、これまでの標本調査での親しい人々の中には含まれない関係である。本事例では、このような周辺的な関係において機関とパーソナルネットワークの関わりが見出された。

親戚関係に分類された関係のほとんどは、対象者方の親戚であり、妻方は7名のみであった。親戚の数が多いため、どこかしらの冠婚葬祭で会う機会があり、最低でも年1回は会うようである。実弟とは特に親しく、月2・3回週末に食事をしたり遊びに来たりする。但し、親戚内の親しさの順は現在の交際頻度よりは血縁順に示した。最も親しい人として、現在、冠婚葬祭の他、年2回ぐらいしか会わない実兄を筆頭にあげ、ついで実弟、実姉妹の順に挙げている。その後には、母方のイ

トコ7名、父方イトコ1名、オイメイ、イトコの子どもと続き、最後に妻のイトコとその弟、オバ、イトコ、兄弟となっている。妻方の親戚は現在も妻の法事に来てくれるので関係が継続している。また最初にあがっている妻のイトコとその弟は、この弟が日光でホテルを経営しており、月に1回ぐらいそこに遊びに行くこともあり妻方の親戚の中では最も親しさを感じているそうだ。世代的な問題もあるが、「親戚」というカテゴリーは、他のカテゴリーとは質的に独立した領域を形成するようである。実質的なサポート関係に注目すれば、親戚も友人も代替は可能な部分があろうが、主観的なパーソナルネットワークの内部構造レベルにおいては、区別され認識されているようである。今後は、多くの世代の事例を集めることで、パーソナルネットワークにおける親戚の位置づけがより一層明らかになろう。

親戚以外に最も親しい人びとは上述の②～④のカテゴリーに含まれる小中学校の友人達である。彼らとは、卒業後も継続してつき合ってきた仲間であり、退職後急に活発になった付き合いではない。彼らとは、長年継続してつき合っているので、同じ同窓生の中でも、親しさの度合いや現在の接触頻度・会う機会も様々に分化している。まず青山学院時代の友人達は、親しさの度合いで②と③に分かれているが、「②特に親しい青山学院時代の友人」の内部はさらに、付き合い方の差で「同窓会幹事（5人）」、「同窓生（5人）」と、「死んだ同窓生や恩師の配偶者（3人）」に分かれる。彼女たちは同窓会には参加しないが、個人的な付き合いがある。また、本人の社交的な性格もあり、何かの機会があって仲間内で集まる場合、中心になって声をかけるのは対象者だそうで、現在同窓会の幹事を任されている。自分が幹事になる際、仲のいい同窓生も一緒に幹事に引っ張り込んだ。そのため、「②特に親しい青山学院時代の友人」の中でも、幹事仲間は親しさの度合いが高い人たちで形成されている。また、ここにあがった学校時代の友人の多くは都内に在住していることもあり同窓会以外にも、何とはなしに声をかけて集まる仲間でもある。他にも、同窓会という文脈を離れても関係性が継続しているパターンとして同窓で医者になった者との関係がある。月に1回は、この方の所に診察し薬をもらいがてら訪ねる。その際、その医者の近くに住んでいる同窓生も呼び、三人で食事をしたりしている。また、恩師の妻は、30年ほど前近所に引っ越してきて、近所の美術館の館長を務めている。近所ということもあり月に3、4回訪ねる。また、1人の同窓生の妻は伊豆で喫茶店を経営しており、たまにそこに遊びに行くという。もう1人の同窓生の方は、同窓生の死後はよく相談にも来たのだが、孫が生まれてからは会う機会は少なく現在は季節の挨拶程度だそうだ。「④小学校での友人」は、「病気のため現在疎遠」2人、「年5、6回会う仲間」3人、「年2、3回会う仲間」5人、「親しさの1ランク落ちる同級生（同窓会のみの付き合い）」4人と現在の接触頻度別に分かれ、それに「終戦後親しかった方」という別格の友人が加わる。年5、6回と年2、3回との頻度の差は、互いに声をかけて近くで飲み食いする機会が年2、3回はあるが、「年5、6回…」との仲間とはそれに加えて年2、3回の旅行もするので頻度が多くなっている。関係性としては、同じ様な質的意味をもっているが、経済的・時間的余裕の差が、結果的に現在の接触頻度の差を生んでいると考えられる。その一方で「終戦後親しかった方」との関係は、彼らとの関係とは少し異なった質的意味をもっている。一見社交的で明るい人柄に見える対象者の、外見からは見えにくい内面を感じさせる興味深い関係性である。「終戦後親しかった方」とは、彼が「今はもう、俺は人と会わないようにしているんだ」と言っていることを考慮して、現在は会わないようにしているそうだ。対象者自身も「僕もね、どっちかというとそうしたいんだよ、今。生活空間をからっぽにしたいっていうのが僕の理想なんだよ。…空っぽにしたいんだよ。身を軽く」と、この方の心境に共感している。対象者は、インタビュー中、自分の友人の基準として「心に悲しみを持たないものは認めない／つき合わない」「咀嚼のないおしゃべりをする人は無視する」と、述べてくれた。この格別の友人とは、上記の基準に当てはまる大切な友人だからこそ、相手

の考えを尊重し、現在はあえて直接会うことをせず、年賀状だけの付き合いをしているものと考えられる。本調査では、調査時間の都合や、対象者がそれ以上語りたくないようであったために、これ以上深くこの方との関係を聴くことが出来なかったが、この事例のように長い年月を経て形成してきた関係の場合は、現在会う頻度のみでネットワークを測定すると、接触頻度は多くはないが親しさを感じており、対象者にとっては大切な関係と位置づけられている人物を見落としてしまう。接触頻度などで測定できる日常の実践的な支援関係以外のネットワークを、どのようにデータとして収集し、意味づけるかは今後の課題でもあろう。

ところで、対象者はこのような学校時代の友人に対してどのような意味づけをしているのだろうか。彼は、大学時代の友達と中学（高校）時代までの友達を区別している。特に中学までの友人達を「東京県人会」と名付け、自分の成長の過程を映し出す鏡、準拠集団として意識しているようである。対象者は、この感覚を理解させるために以下のようなたとえ話をしてくれた。

例えば、5年ぶりに友人と会って、「俺こんなつまんない男とつき合っていたのかなあ」っていう感じになる時は、どっちが進歩しているか、どっちかが衰えている時なんだよ。お互いに進歩していれば、5年経っても10年経っても話し合えるんだよ。これはジャンルの問題じゃなくて、求めるものがあれば、学歴とか知識とかそんなもんじゃなく、60年経っても仲良くつき合ってられる。これは不思議なもんだよ。……そういう成長がないと、コミュニケーションっていうのは同等には出てこない。建前だけになる。そういう付き合いは切っちゃってもいい……。

ここには、人生の「道づれ」（Plath、1980）として、学校時代の友人を意識している姿が読みとれよう。彼がこの人生の道づれを、「東京県人会」と名付けるのは、「この時期以降に知り合った友人は、生まれの違いからいろいろ異なった考えを持っているが、中学までの仲間は色々な意味で同じ様な仲間だから」と、述べている。そこには、自分と同じ様な社会階層の者達を準拠集団ととらえ、そこでの自分の相対的な位置づけで自分の成長を計っている姿が見える。本事例のように対象者が積極的に学校友人を意識する姿勢は、特定世代の特定階層特有の傾向かもしれないが、一方で、学校友人と継続した関係性をもつことの1つの機能をも表していよう。つまり、同時代を生きている人間とは、社会に出ても毎日のように会うが、彼らの多くは、生まれも育ちもまったく異なった人々である。そのような中で、人生の根っこの部分を共有している友人は、異なった社会で生きていようとも共に同じ時を歩んでいる「道づれ」として感じやすいのであろう。また、一般に高校ぐらいまでは、その学校に集まる生徒の生まれや社会階層も、大学に比べれば、似かよっていることが考えられ、大きく見れば似かよった価値観の仲間の中で過ごす時期と解釈でき、そのことが一層の親近感を抱くものと思われる。

本事例を始め、多くの事例において、学校時代の友人はパーソナルネットワークの一部分を形成する。本事例は、他の事例に比べ、学校時代の友人との継続的な頻繁な交流に特色がある。ここで示された様な人生の「道づれ」としての機能が学校時代の友人に見られるケースは、多かれ少なかれ他の事例にも存在している。また、多くの事例の場合、学校時代の友人との付き合い方として、同窓会であれ個人的にであれ、何人かで集まって飲んだりしゃべったりする付き合い方をしている場合が多く、悩み事の相談などの実際的な援助機能に特化して集まることは少ない。学校時代の友人達とは、同じ根っこを持った気安さから、一緒に集まって楽しみ、そのような中で自分の成長を確かめ、相手を「道づれ」として再確認することを通じて自己の人生を安定させるのと同時に活力を与える関係として機能しているのではないかと考えられる（藤崎、1998）。

(2) 地域性の現れ：印刷街における独身男性の職住近接型ネットワーク（文京K．Hさん、38歳、独身）

K. Hさんは、文京区の印刷街の印刷会社に印刷工として勤務しており、居住地も職場から徒歩5分圏内にある。現在38歳、独身である。出身地は新潟県であり、高校卒業後18歳で埼玉県に上京。東京の紡績工場に高校の紹介で就職。1年でここを辞め、印刷業界に転職。同時に埼玉県内に住んでいるオバ夫婦の家の近くに引っ越す。この時、創価学会員であったオバの影響から、自分も創価学会に入る。特別な活動はしなかったが、創価学会を通じて同年齢の仲間ができた。その後、借金などをつくってしまい一時田舎に戻る（23歳）。田舎では結局仕事がないので、直ぐ東京に戻り1年ほどアルバイトをしていた。24歳で再び印刷業界に就職。25歳で現在の会社に移り今に至る。現在の職場は、従業員が6名（内2名は既婚）の印刷所である。企業規模が小さいため、全ての人物と顔見知りである。

対象者は、本研究中唯一年賀状を一枚もやり取りをしていない事例である。このことは逆に、年賀状というメディアからパーソナルネットワークを把握する際の限界をも提示する形となった。対象者が年賀状のやり取りがない理由として、第1に独身であるため親戚との付き合いは親が行い年賀状を出さないこと、第2に印刷工という職業は会社を移ることが頻繁にあり、職場で知り合った仲間も会社を移るので互いの住所が確認出来なくなること、第3に現在は職場と住居が近く、現在親しくしている人びととも、ほとんど近隣に住んでおり直ぐ会えるのであえて年賀状を出す意味があまりないことが考えられる。これまでの事例から、年賀状を資料にすることでパーソナルネットワークを把握する方法の一定の有効性は示せたと思えるが、この事例のような、単身で、職場と居住地の職住近接型の生活である場合は、年賀状は必ずしも有効な資料とはなりえないと言えよう。

年賀状はなくとも、他の事例の聞き取りの経験から学校時代の関係、職場などの現在の活動の中心となる場での関係や、移動歴にそっての人間関係をじっくり聞くことで、パーソナルネットワークを同様に把握できることが分かっていたので調査を進めた。聞き取りの結果、「①飲み仲間」4名、「②同級生」3人、「③親戚」4人、「⑤職場の先輩」1人の、5カテゴリー12名があがった。

「①飲み仲間」は、職場から徒歩5分圏の「行きつけの居酒屋」でよく会う4人である。うち2人は前の会社で一緒だった仲間であり、残り2人はこの居酒屋を介して知り合った同じ印刷街で印刷業を営む夫婦である。彼らとは週に1回程度この居酒屋で顔を会わせる。「困ったときお金を貸すのは、この4人と会社の仲間」と言うほど重要な人物達である。同じ会社に勤めている者同様、この居酒屋での交流を通じて、同じ町に生きる同じ印刷を仕事としている仲間意識が形成されているようである。また、この4人の共通の趣味はギャンブルで、競馬の話で盛り上がるそうである。但しこの仲間とは、「行きつけの居酒屋」に集まって楽しむのがほとんどで、互いの自宅を訪問し会うことはほとんどないそうである。この点は、イギリス労働者階級のパブを通じての関係と類似している（Allan、1989；1996）。この4人の中には、最も親しい元先輩が含まれている。他の3人が10年間の付き合いであるのに対し、彼は対象者がここに移ってきた時の会社の先輩であり、13年間の付き合いである。彼は40歳独身で一つ年上である。この居酒屋で会うばかりでなく、近くの店へ2人でのみに行くこともある。また、つきあい始めた後に分かったことであるが、彼も創価学会信者であった。親しくなった理由の一つとして、互いに同一宗教を通じて身につけた考え方の近さから自然と親しくなったのではと回想していた。この元先輩は、現在、対象者にとって、色々なことを相談できる最も親しい友人である。

「②同級生」はいわゆる幼なじみである。小さいときからの付き合いであり、同級生（男）とその弟、同級生（主婦）の3人とは、年に1回ぐらい田舎に帰ったときに誰かの家で会う間柄である。彼らが東京の対象者の所を訪ねることはこれまではない。

「③親戚」は、19歳―23歳の時に近くに住んでいた埼玉のオバ夫婦と府中のオジ夫婦である。埼玉のオバ（父の妹）夫婦とは近くに住んでいた時は毎日のように会っていたが現在は年2回ぐらい

電話があったりたまに会う程度。府中のオジ（父の弟）は、府中で自営業を営んでおり、年1回ぐらい家関係のことで顔を会わす程度の付き合い。

「④職場の先輩」は知り合ってからまだ5・6年だが、50歳と自分より年上ということもあり、年下の人よりはつき合いやすいそうだ。同じ職場で働いてる仲間は全部で6名いるが、自分より年上は彼1人だけである。彼とは日曜日に一緒にパチンコをしたりもするそうだ。前述のように、会社の仲間全員に対しては、困ったときにはお金を貸す相手として「仲間」意識はもっているが、「親しい人物・友人」というゾーンとは別のもののようである。アラン（1989、1996）がイギリスの労働者階級の事例を取り上げて指摘しているように、階層ごとに関係性の質は分化している可能性が考察され、一次元的な「親しさ」という度合いで全ての関係を計る場合には、その解釈に十分な注意を払う必要があろう。本事例の場合、このような「親しさ」は、職場よりも居酒屋を通じての仲間の方に感じている。この先輩を除いては、同じ会社の者は、自分より若かったり、結婚していたりしており、そのため独身者である対象者とのライフスタイルの相違によって、仲間とは認識していても、親しさの度合いはやや低い原因であると考察できる。

また、現在会えないが会いたい人物として、埼玉のオバ夫婦の近くに住んでいた時の同世代の創価学会員20人位のうち、非常に親しかった3人を挙げている。しかし、自分も一時田舎に帰ってしまったし、相手も田舎に戻ったらしく現在は音信不通。このように互いに住所を把握することなく移動してしまっていることが年賀状のやり取りがない要因の1つであろう。また信仰に関しては、現在は宗教的集会があれば参加することもあるが、若い頃のように、仲間と集まってどうのということはない。特に、宗教を介しての友人はいないそうだ。但し、信仰心は今でも持っているそうである。

以上のように本事例のパーソナルネットワークは、故郷の同級生として3人があがっているがほとんど接触はなく、日常的なパーソナルネットワークは「居住地」「職場」「行きつけの居酒屋」を囲む徒歩10分圏内ぐらいの空間を中心に展開されている。また、この空間は同じ印刷業に従事している者が集住している地域と重なると考えられる。つまり空間的凝離がパーソナルネットワーク形成と関わっていると考察できる。そこで、このような職住近接型ネットワークを成立させている要因を、対象者の属性的要因も含めて考察してみる。

まず第1に、38歳の独身であることがかえって、「自宅」「職場」「居酒屋」という徒歩10分圏内に生活圏を限定させていると考察出来る。本人自身、このような近隣の徒歩10分圏に行動範囲が限定されている理由を「普段からめんどくさいので余り遠くまでは行かない」と、述べつつも、加えて「自分には家族がいないので、子供を遠くまで連れて行く必要がないので」と、述べている。また、「会社の仲間と休日出かけたりしないのか？」という質問に対しても、「職場の他の仲間は若いから、（休みに一緒に出かけるほど）余り親しくない。また、家族がいる人（6人中2名）は、休日、家族を連れて行かなくてはならないから、あまり一緒に出かける機会はない」。と答えてくれた。しかしながら、近所に住む最も親しい先輩とは、独身同士ということもあってか、気軽に出かけたりもしているそうである。また、居酒屋に集う親しい友人達との共通の趣味は競馬、パチンコといったギャンブルであり、競馬も、競馬場まで出かけるのではなく、主に近くの場外馬券場で済ますそうである。このことも生活圏を近隣に限定している一因であろう。

第2に、移動歴との関係からも、このような空間的に限定されてネットワークを形成している原因を考察できる。対象者は、前述のように高校卒業後から25才で現職につくまで5回移動している。この移動経験の多さが、様々な時期に知り合った友人との継続的な交際を困難にし、ネットワークを現在の居住地に移ってきた後の知り合いとの関係に限定させる要因となっていると考えられる。例えば、繰り返しになるが対象者は現在会えないが会いたい人物として、埼玉のオバ夫婦の近くに住んでいた時の同世代の創価学会員20人位

のうち、非常に親しかった3人を挙げている。しかし、自分も田舎に帰ってしまったし、相手も田舎に戻ったらしく現在は音信不通である。このように互いに住所を把握することなく移動してしまっていることが、現在に限定されたネットワークを形成している遠因であろう。

第3に印刷工という仕事の特殊性があげられる。印刷工は、労働条件がきついせいもあり、会社をかわるという同職種内移動が頻繁な様である。このため、昔の職場の仲間とはなかなか交際が継続しない様である。実際、対象者の以前いた会社には、現在1人も自分が働いていたときの仲間はいないそうである。その一方で、印刷街内の他の会社に移った場合には、近隣の居酒屋などでばったり顔を会わし交際が復活することや、本事例の2名のように、会社はかわっても行きつけの居酒屋を通じて関係性が継続する場合がある。地域内に限っては、印刷工の仲間との関係が重なり合っているので、同じ様なライフスタイルを共有している者同士の結びつきは離れにくい傾向があろう。

第4として、就職に関して親類縁者などの人的なつながりに頼ることをしていないことが指摘できる。現在の会社に移る際も、以前の仕事は給料が安い上に余りにもきついので、辞めようとしたところ、その噂を聞きつけた現在の会社社長が「うちで働かないか？」と声をかけてきたそうである。だからといって、元々現在の社長と親しい間柄であったわけではないそうである。普通の、雇用者と雇用主の関係である。もちろん、調査にあがってくる親しい間柄の人物でもない。何故、現社長が対象者の退職を聞きつけたのかと聴いたところ、対象者の言うところによると、「この業界（印刷業界）は、非常に小さく筒抜けなので、例えば何か悪いことをした人は直ぐに業界内に知れ渡ってしまう」そうである。業界内での横のつながりの緊密さが現在の社長の耳に、対象者が会社を辞めるという情報を運んだようである。対象者は、人脈を用いて転職などをするタイプではなく、そのため、職業的地位達成に資するネットワークを積極的に形成しないことが、地域限定的ネットワークに特化する一要因になったとも考えられる。

最後に対象者の居住地が東京の中心部に近い空間であり、又、印刷街にほど近い位置にあることを重要な要因とあげておこう。対象者のパーソナルネットワークは印刷街という個性のある地域を中心に形成されていた。この地域は、この印刷街で働く者のために、商店街や飲食店といった機関も同時に発達している。本稿では、行きつけの居酒屋との関わりしか明確な形で、ネットワーク形成との関係を示すことが出来なかったが、このような都心近くの空間における機関の集積は、共通するライフスタイルの地域内での出逢いを可能とさせ、この事例の様な（独身者の）職住近接型のパーソナルネットワークを成り立たせていると考察されよう。

3．まとめと考察

本研究は、年賀状を資料に用いてこれまでのパーソナルネットワーク研究ではあまり焦点の当てられることの少なかった、弱い紐帯もふくめたパーソナルネットワーク全体の把握を事例研究によって目指した。調査依頼状送付時点では、全体で50事例ほどの調査協力を期待していたが、実際はその半分にも満たない19事例しか協力を得られなかった。事例数は少数ながら、年賀状により幅広い範囲の関係が把握できることや、現在関係性が継続しているパーソナルネットワークの形成過程はきちんとたどれることなど、年賀状という資料を用いる有効性はある程度示せたと考えられる。一方、分析途中であるため、現時点では社会階層や地域性、ライフコースパターンといった視点への分析には至っていない。

本研究で取り上げた、第1の高齢者の事例の場合、従来どおり最も親しい人（強い紐帯）のみに注目したならば、その大半が「親族」と「学校友人」となり、その構成は社会階層的視点からもきわめて同質的なパーソナルネットワーク像が浮かび上がってくる。しかしながら、本事例調査で明らかにしたように、もう一回り幅広い弱い紐帯もふくめたパーソナルネットワークを捉えることで、実際は周辺部での多様な人々とのつながりを維持

している様子が見えてきた。そして、このような多様な関係性の形成・維持には、都市の様々な機関の存在が関わっていた。また、第2の事例では、同職の仲間とは必ずしも「職場」のみでつながっているのではない点が明らかとなった。きっかけは同じ会社の同僚であっても、地域内でのライフスタイルを共有している者同士のつながりは、職場がかわった後でも、居酒屋という機関を通じて関係が維持されていた。この場合は、一見同じ職業による同質的な結合のみに見えやすいが、実際には、むしろ職場よりは、その背後にあるライフスタイルの共有とそれを支える地域内の機関という側面がこの関係性維持にとっては重要な意味を持っていることがわかる。

特に、パーソナルネットワークと機関との関わりに注目するならば、第1の事例は、周辺部分でのパーソナルネットワークと機関の関わりが見出された事例であり、これは引退した都市型高齢者の典型的な事例とも言えよう。また第2の事例は機関の集積がパーソナルネットワーク形成に影響を与えた事例であり、職住近接のライフスタイルを共有している工員たちの典型といえよう。このように、パーソナルネットワークは、都市の主要な構成要素である機関と、個人の属性的要因である社会構造上の地位とライフコース上の位置の関数で決定されていると言えよう。

今後は、対象者をランダムに抽出するのではなく、社会階層、地域、ライフステージなどをある程度限定した上で、事例数を選択することが必要であると思われる。そうすることによって、初めて、機関の関わり方と、社会構造上の地位とライフコース上の地位のパーソナルネットワークに与える影響が具体的に把握され、事例調査によるパーソナルネットワーク研究の都市社会学における有効性の道がより明確に開かれると思われる。

注

1) より詳しい報告については、森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』10章「事例分析－年賀状による拡大パーソナルネットワークの分析」東京大学出版会（近刊）を参照。
2) 本研究に先行して行われた郵送調査の結果、研究全体の目的は、総合都市研究第64号で特集されている。

参考文献

浅川達人「都市度と友人ネットワーク：生活空間を用いた分析の試み」,『総合都市研究』64, p.17-24, 1997.

藤崎宏子『高齢者・家族・社会的ネットワーク（現代家族問題シリーズ4）』培風館，1998.

石原邦雄「年賀状からみた家族・親族関係」,『ケース研究』第2号，No.118，p.61-71，1970.

岩上真珠・森岡清志「シンルイとオヤコ：山梨県南都留郡足和田村長浜」，喜多野清一・正岡寛司編著『「家」と親類組織』早稲田大学出版会，p.129-185，1975.

松本康「現代都市の変容とコミュニティ、ネットワーク」, 松本編『増殖するネットワーク』勁草書房, p.1-95，1995.

森岡清志「都市社会とパーソナルネットワーク：パーソナルネットワーク論の成果と課題」,『都市問題』86-9，p.3-16，1995.

森岡清志・中尾啓子・玉野和志「都市度とパーソナルネットワーク：研究目的・経過・結果の概要」,『総合都市研究』64，p.5-15，1997.

大谷信介『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク：北米都市理論の日本的解読』ミネルヴァ書房，1995.

笹森秀雄「都市における社会関係に関する実証的研究」,『社会学評論』6-2(22)，p.58-83，1955.

Allan, Graham, *Friendship : Developing a sociological perspective*, 1989（中村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社，1993）.

Allan, Graham, *Kinship and Friendship in Modern Britain*, Oxford university press, 1996.

Boissevain, Jeremy, *Friends of Friends: Networks, Manipulators and Coalitions*, Basil Blackwell and Mott LTD., 1974（岩上真珠・池岡義孝訳『友達の友達：ネットワーク，操作者，コアリッション』未来社，1986）.

Fischer, Claude S, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, Chicago, IL: University of Chicago Press, 1982.

Plath D.W., *Long Engagements: Maturity in Modern Japan*, 1980（井上俊、杉野目康子訳『日本人の生き方：現代における成熟のドラマ』岩波書店，1985）.

Wellman, Barry, "The Community Question", *American Journal of Sociology*, 84, pp.1201-31, 1979.

Key Words（キー・ワード）

Personal Network（パーソナルネットワーク），**Week Ties**（弱い紐帯），**Strong Ties**（強い紐帯），**Intimate Network**（親しい間柄のネットワーク），**Social Structure**（社会構造），**Urban Institution**（結節機関），**New Year's Cards**（年賀状）

Personal Networks of the Metropolis of Tokyo: A Case Study using New Year's Cards (Nengajo)

Takuya Yabe*

*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University

Comprehensive Urban Studies, No.69, 1999, pp.137-150

This paper describes the relationship between the urban structure and individuals' personal networks based on a case study in Tokyo. The study utilized New Year's cards received by the respondents, which enabled us to elicit information about various types of personal contacts including those with strong ties as well as with weak ties. We describe the inner structure of individuals' personal networks, and elucidate the process through which personal networks are formed as a function of individuals' association with urban institutions, positions in the social structure, and their respective stage in their life-course.